

内弟子として仕えて ディラン・シャナハン



五年前、JETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）の書類に記入している時、日本のどこに行きたいかの希望欄に、私は「特に無し」と記入しました。日本に住んで仕事をする傍ら、合気道を習いたいと考えていましたが、誰がどこで教えているかの情報をほとんど持っていませんでした。

そこで、日本に到着し、現地の高校の英語課の監督の先生に私の赴任先の入間市のアパートに連れて行ってもらったのですが、何か運命的なものとしか言いようがありません、その監督の先生が偶然、小林道場の会員でした。

彼は私のJETプログラムの願書の書類のエッセイを読み、私が合気道に興味があることを知っていました。日本での新居、新しい仕事、新しい生活が落ち着くと、彼は私を小林道場の稽古に連れて行ってくれました。日曜日の所沢での稽古でした。

私の赴任先は私にとって最良の場所でした。東には小林道場があり、西にはハイキングしたくなるような丘に囲まれていたからです。さらには数分で貴重なピーナッツバターやアメリカ産のチーズが手に入るコストコがあったことも大きかったです。

小林道場で、開祖のスタイルに近く、長年の稽古の経験があり、暖かく迎えてくれるコミュニティの一員になれたことは、とても幸運なことでした。

乏しい日本語能力しかない上、日本という異国の地で一人ぼっちで生活していた私が、日本文化に溶け込み、社会的なつながりを持つ上で、このコミュニティが重要な役割を果たしてくれました。

全ての会員の方々にお礼が言いたいです。ズボンの紐の結び方から組太刀の細かい動きまで、色々と教えてもらいました。また、忘年会、新年会、バーベキュー、花見、岩井合宿、孀恋合宿、誕生日会、歓迎会、送別会、と、素晴らしい思い出の数々に、感謝の気持ちでいっぱいです。

小林道場での生活を端的に表すと、「パーティーして、一所懸命稽古して、そして一所懸命遊ぶ」となります。乾杯！

フォークシンガーのボブ・ディランの歌に「ガッタ・サーヴ・サムバディ」という曲があります。その曲にあるように、私たちは皆、誰か、もしくは何かに仕えているのではないのでしょうか。

合気道という、宇宙の深淵と同じぐらい広大で摩訶



不思議な世界で、私たちは何に仕えているのでしょうか。

経済的に発展したアメリカや日本に暮らしていると、資本主義社会を働くことや消費することによって前進させるために自分が存在しているように感じられてきて、何か満ち足りない気持ちになってきます。

それ故、小林道場での昇級昇段審査とそのために準備することは、私にとって日本での生活の指針となってくれました。

一つの到達点に至る度に、新しい目標、新しい技のレベルを見出すことができ、さらに高いところへ向かうように私を渴望させるのです。

そして、積極的な挑戦として、また日本でしかできない経験として、さらにはそれまで様々なことを教えてくれた道場に対して恩返し of 気持ちも込めて、小林道場での内弟子修業を希望しました。

残念ながら私の仕事と休みのスケジュールでは内弟子体験のために時間をとることはできませんでしたが、JETプログラムとの契約が終わり、未知のステップを踏み出す機会を得ました。合気道を生活の中心に置き、合気道のことだけを考えるだけの生活を、ついに始めることができたのです。

これまで私は、様々な武道関係の本や、映画「ベストキッド」などにあるような典型的な日本武道のイメージに晒されながら育ってきました。

住み込みプログラムに対して幻想を抱いていたかもしれませんが、それでも何百年も前から続く日本の師弟制度に似たものがそこにあったと思います。

小平と所沢を行ったり来たりの日々はまるで夢を見ているような感じでした（寝不足のせいかもしれませんが・・・）。

映画の中でダニエルがしていたように、道場の掃除と稽古の他にも「内弟子仕事」がありました。

所沢道場のガスストーブと無線LANはありがたい設備でした。

私が一番感銘を受けたことは、日本における「内弟子制度」はまさしく「どう仕えるかを学ぶ」ためにあるということでした。

たとえちょっとした仕事であっても、また大きな役目であっても、合気道の仲間が力を結集し、指導部の先生方がそれを導いていきます。

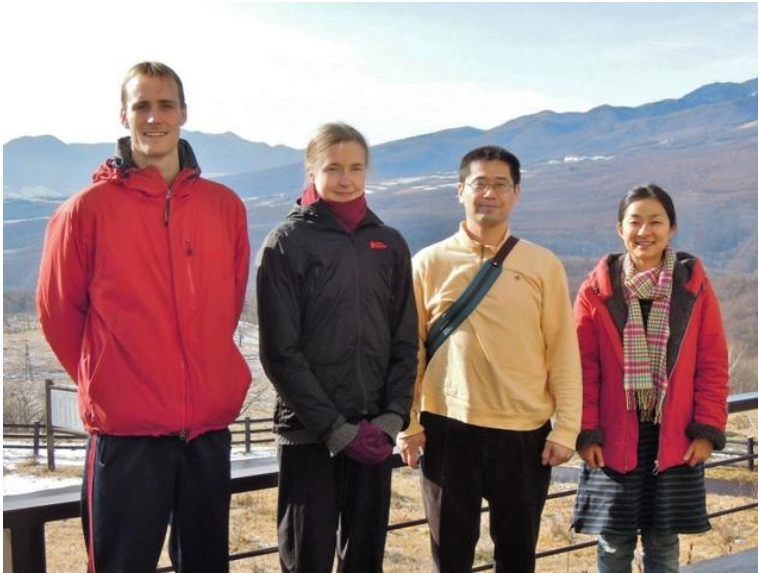
私は小林道場の指導部の先生方が道場での責任ある役目を与えて下さったことに感謝しています。

それにより、私は合気道小林道場の一員になれたと感ずることができました。

疲労と筋肉痛の毎日で、この道場との一体感は私にがんばり続ける勇気を与えてくれました。

稽古そのものも私に活力を与えてくれるもので、幸運にも内弟子にはその豊富な機会がありました。そのため、疲れを感じたのは稽古の合間だけでした。

小林道場での稽古は、例えて言うなら「活気に溢れた雰囲気」という波に乗るサーフィンのようなものです。



継続的な稽古は私に技の上達と、合気道に対するさらなる理解を促し、それがまた刺激やインスピレーションの源となりました。

技の洗練は道場の掃除によってさらに加速されました。

道場は清潔に保たれているほうが望ましく、そのような道場であるからこそ、合気道の技も長年の切磋琢磨により磨かれていくものだからです。

この住み込み制度のおかげで、私は自分がどこを向上させなければならないのかが明らかになりました。先生方や会員の皆さんのおかげです。

また、日々の生活、健康、姿勢等を見直す機会ともなりました。

多くの稽古の機会を通して、まだまだ沢山のことを学ばなければならないということも自覚することができました。特に呼吸法の技についてはもっと頑張らなければなりません。

この期間中、できるだけ多くのことを吸収できるスポンジになるよう、努力してきました。その結果、合気道の世界にどっぷり漬かり、様々のことを吸収することができました。またいつか体験したいと考えています。

おそらく、今後は内弟子期間中のように頻繁に稽古することは無いかもしれませんが、また、頻繁に掃除することも無いかもしれません。しかし、「内弟子の心」だけは忘れずにいたいと思います。

稽古の無い休みの日でも、朝早く起きて道場を掃除します。これは「内弟子の心」を失わないためにも大切なことです。それに通常朝五時に起きているので、休みの日でも早起きしたほうが、生活パターンが崩れず楽です。

内弟子は常に、先生方や会員の皆さんのために奉仕するように期待されています。

この奉仕を通して、私は次のステップに至ることができました。奉仕という自己犠牲を通して私は自分の稽古から「自我」を取り除くきっかけを得ました。

小林道場は長い年月を通して、国内外で合気道の普及に邁進してきました。四十周年の時はあたかも国連の会議のように国際色豊かな感じでした。

私もその活動の一助となりたく思います。内弟子プログラムはそのためにも重要なものでした。

内弟子プログラムを通して、私は道場運営についても垣間見る機会がありました。備品管理、合宿、演武会、審査等、近くで見るとは非常に勉強になりました。

小林道場の先生方の援助、励まし、指導には大変感謝しています。

将来、自然薬品のクリニックを開きたいと考えていますが、それと同時に合気道を小林道場の暖かい雰囲気とともに自分のコミュニティで提供できるようにしたいとも考えています。

その時が来ればアメリカ西海岸に道場を開き、日本の皆さんから受けた言葉をそのまま返せるようにしたいです。「どうぞ合気道の稽古にいらっしゃい」と。

そのように皆さんに恩返しできる日を楽しみにしています。

